

フィリップ・ラーキン「かなり悪い事態」を読む

—三つの読み方による解釈の可能性—

君島利治*

(平成20年2月22日受付/平成20年6月6日受理)

要約：この拙論は、フィリップ・ラーキンの詩「かなり悪い事態」の三つの読み方を提示し、この詩の解釈の可能性、その広がりについて論考したものである。一般的に、この詩は日常的な失敗から自分の運のなさ、敗北感を感じるというごくありふれた内容によって、ラーキン的な運命論や宿命論を導き出している。しかしその奥には、詩作に行き詰まり癪癪を起こした詩人が、ふと我に帰り詩作の可能性を見出し、自分を鼓舞する詩とも解釈できる。さらにメタファやイメージを最大限に生かして拡大解釈すると、この詩は性的な内容に溢れ、自分の恋人達との性交の場面を描写している詩とも解釈できる。これら三つの解釈のどれが最もふさわしいかは、やはり読み手に委ねられてしまうわけではあるが、既述した読み方が進むに連れ、詩人の真意に近づいているのではないかと考えられる。

キーワード：フィリップ・ラーキン、「かなり悪い事態」、『降臨節の婚礼』、英文学、近・現代詩

比較的新しい詩人であるためか、ラーキン (Philip LARKIN, 1922-85) の詩に関する先行研究、参考文献は少ない。我々読者が詩を読む際、ましてや研究の対象として論考しようとする場合、参考文献の絶対的な少なさは致命的になりかねない。残念ながらここで取り上げる詩「かなり悪い事態」(‘As Bad As a Mile’) も直接的に参考になる文献がほとんど存在しない。故に我々は、手さぐりの解釈を進め、この詩について論考していかなければならない。唯一救いなのは、ラーキンが自分の詩の解釈に関して「どうとっていただいても構わない」とコメントしている点である (櫻井 146)。

この詩は1960年2月9日、ラーキンが37歳の時に完成し、後に詩集『降臨節の婚礼』(The Whitsun Weddings, 1964) に収められる。1連3行の2連構成、計6行という極めて短い詩であり、行数では詩集の中で最も短く、生涯作品でも6番目に短い詩のひとつである¹。しかし、極めて短い詩でありながら、この詩は見方を変えると、一般的な内容から性的な内容まで³ パターンの読み方が可能となり、ラーキンの他の詩と同様、やはり解釈の可能性が広がっている。ここではその三つの読み方を提示し、この詩の解釈の可能性、その広がりを探っていきたい。

As Bad As a Mile

Watching the shield core
Striking the basket, skidding across the floor,
Shows less and less of luck, and more and more

Of failure spreading back up the arm
Earlier and earlier, the unraised hand calm,

The apple unbitten in the palm. (THWAITE 125)

かなり悪い事態

投げたりんごの芯が
ゴミ箱に当たり床を滑っていくのを見ると
ますます少なくなる運とますます多くなる敗北感が

りんごを投げた腕からこみ上がってくるのが分かる
いやもっと前 投げる前の冷静な手から
もっと前 手の中にあった食べる前のりんごからだ

I. 一般論として万人に向けた詩

目に見える光景はありふれた失敗である。ゴミ箱めがけて投げたりんごの芯 (core) は、ゴミ箱にぶつかってしまっただけで入らない。ぶつかったりんごの芯は床に転がり横滑りしていく。“Watching” (動名詞) と “Striking”, “skidding” (現在分詞) という “-ing” 形の繰り返しは、その一連の動作の連続性をスピード感も含めてリズムカルに強調している。そのようなありふれた動作で運試しをすること、その失敗から自分の運のなさ、敗北感を感じることは万人にとってそう珍しいことではない。

自分の運の無さ、敗北感を出するため、“less and less”, “more and more”, “Earlier and earlier” と、これでもかとはばかり比較級を重ねてくる。この繰り返される比較級の中、最初の二つ、“less and less” と “more and more” は、先の “-ing” 形の反復とは対照的に、その敗北感、運のなさが徐々に実感となってこみ上げてくる様を効果的に表現している。ただ、ここで比較級を繰り返しているということは、常に自分の不運や敗北というものを詩人

* 東京農業大学生物産業学部教養分野 (英語)

が感じているからとも考えられる。それが運試し、賭けといってもよいが、それをするにより日常以上の感じ方で痛切に実感していることになり、駄目押しを与えていると考えられる。普段から自分の運のなさ、敗北感を抱いている者であれば、狙って投げている、つまり成功を求めてりんごの芯をゴミ箱へと投げた行為の失敗は、当然いつも以上の敗北の実感とともに、自分の運のなさという現実に対する納得へともつながっていく。さらにそれは、

Success deludes the mind into believing that it controls the hand : failure proves incontrovertibly the polarity of the mind's will and body's way. As there is less and less of "luck" (the happy coincidence of desire and attainment), there will be less and less of desire. (KUBY 50)

成功は精神を惑わせて精神が手を制御していると信じ込ませる。一方、失敗は明白に精神の意志と肉体の方法との矛盾を証明する。「運」(願望と達成の幸福な同時発生)が少なければ少ないほど、願望もより少なくなるだろう。

と普段から不運で敗北感に満ちた自分が投げたりんごの芯がゴミ箱に入る由もないという悟りにすら感じられる。

しかし、三つ目の 'Earlier and earlier' は、先の二つとは性格を異にしている。詩人はここで自分の失敗の原因を探っているのである。自分の不運、敗北は失敗したという事実よりも時間的に前の段階にすでにあったと詩人は考えているのであり、運のなさ、敗北感の真の出处へと時間的に戻して (back) いく様を表したものである。

その原因究明はまことにラーキンらしい考え方であり、まずはりんごの芯を投げた腕にあると考える。りんごの芯を上手く投げさえすれば、こんな結果にはならなかった故に自分の腕 (= 投げ方) を責めている。さらに時間をさかのぼれば、りんごの芯を投げようとする前の、まだ挙げていない (unraised) 手へと到る。りんごの芯を持つ手を投げようとして挙げさえしなかったなら、と責めているのである。そしてさらに時間を戻せば、究極的にはまだ食べていない (unbitten) りんごそのものに原因があると結論づける。手の中のりんごを食べさえしなかったなら、りんごの芯をゴミ箱へ投げ入れようとする運試しもしなかったはずだと考えているのである。

ただ、ひとつだけ気になることがある。それは "Earlier and earlier" の前に切れ目が存在していないことである。句読法に従って考えれば、自分の運のなさや敗北感がいつも以上に実感となって投げた腕に戻ってくる、すなわち自分の現実的失敗 (ゴミ箱に入らなかったりんごの芯) を目の当たりにして、間をおかずにすぐ不運や敗北感が投げた手から腕へと広がっていった (back up) とも考えられなくはない。ホームランを打たれた野球のピッチャーのような感覚として、がっくりと肩を落とし、だらりと下げた腕に、単純な運試しであるが故にいつもより早い段階で自分

の不運や敗北といった実感が沸き起こっているのではないかと考えられる。

この二つの読み方は、既述した "Earlier and earlier" を処理する際の句読法とともに、"unraised hand" と "apple" が "spreading" に続くのか、あるいは "shows" の目的語なのかによって決まる。後者でとれば、"calm", "unbitten" はそれぞれ "unraised hand" と "apple" の補語となる。確かに詩の流れに従って考えればそうとすることはいささか無理があるかもしれない。しかしりんごの芯を投げた腕に不運や敗北感があふれでてくる詩人は、それによってりんごの芯をこれ以降投げようとはせず、投げようとしなが故に手に緊張も気負いも生じることなく、冷静でいられる (calm) と判断し、その結果りんごを食べようともしなくなると考えているのではないか。失敗が腕に瞬時に感覚となって現れ出る様を "Earlier and earlier" で表現できても、手とりんごの判断にはむしろ詩人の考察、すなわちある程度の時間の経過を必要とするのではないだろうか。"Earlier and earlier" の前にカンマがなく、その後カンマが置かれ区切られているのはそのためではないだろうか。故にここは読み手の判断によって解釈が混在してしまう。

しかし、混在する二つの解釈のいずれを採択しても、詩人の言わんとしていることにそれほど大きな隔たりは生じてこない。自分の失敗の原因究明を行き着く先まで分析するという一番目の解釈も、その原因を排除すること、すなわちりんごの芯を投げよう手を挙げない、究極的にはりんごを食べないことへとつながり、二番目の解釈の内容へと行き着く。これはすなわち、解釈の混在というよりもむしろ一番目の解釈により原因を究明した結果、二番目の解釈で悟りを開いているという詩人の心境の流れでもであると考えられ、先に引用した KUBY の見解により近づくことになる。

食べ残したりんごの芯を単にゴミ箱に投げ入れる動作から、自分の不運や敗北を実感するというプロセス、その原因が食べ終わったりんごの芯を投げた自分自身を経て、結局はりんごそのものにあるという考え方はいかにもラーキンらしい。失敗を繰り返さないために、りんごを食べても芯をゴミ箱に投げないという決意は分からないでもないが、りんごを食べないといった究極的な決意は所詮無理がある。腹が減れば食欲を満たすためにりんごをかじってしまうのが人間の欲望というものである。結局はこの失敗はなるべくしてなったのであり、人間として生まれた以上、このようなことは多々あるわけで、詩人の言わんとする究極は人間として生まれてきたからには不運や敗北はつきものである。生まれ出てきたこと自体不運の始まりなのである。このありふれた光景から哲学的な思考へと持っていくプロセスもラーキンの常套手段である。

しかし、りんごがあったから悪いのだとする考え方は自分の失敗の責任転嫁であり、あまりにも利己的である。失敗から導き出した悟りによってりんごは一時的に食べられなくなり、九死に一生を得るかもしれない。敗者がいれば勝者がいるように、運がある者がいれば不運な者もいる。

失敗した自分と比較すればこのりんごは幸運であり勝者なのかもしれない。しかし、そのりんごも今自分の手の中にある。自分がかじりつけば、欲望に負けさえすれば、そのりんごの存在も消え、りんごも敗者となる。敗者の自分に食べられてしまう運命にある勝者のりんごとはいかにも皮肉な運命、宿命の縮図が見てとれる。勝者も運のある者もいずれ結局は敗北（ラーキンの場合、その究極は死である）し、不運を実感するようになるという運命がさらに上塗りされる。これもラーキンの常套手段であり、ラーキンの多くの詩に表されるテーマである。故にりんごの存在もそれを食べる自分自身の存在も、途中に運や勝利を感じたとしても最終的には消えてなくなるという絶対的な不運、敗北から逃れることはできないのである。それがこの詩が「簡潔であるがより朗々たる死の表象」(‘concise and more resonant *memento mori*’ MOTION 299) とされる所以である。

II. 詩人として自らを鼓舞する詩

この詩だけに限ってのことではないが、ラーキンの詩の特徴として次のことが挙げられている。

To call Larkin a metonymic poet does not imply that he uses no metaphors — of course he does... Many of his poems have no metaphors at all — for example, ‘Myxomatosis’, ‘Poetry of Departures’, ‘Days’, ‘As Bad as a Mile’, ‘Afternoons’. (Lodge 123-4)

ラーキンを換喩詩人と呼ぶことは、彼がメタファを全く使わないということを含意していない—無論彼は使っているのである。(略)彼の詩の多くはメタファを全く使っていない—たとえば「粘液腫症」, 「出発のうた」, 「昼間」, 「かなり悪い事態」, 「午後」がある。

この見解に対していささか疑問が残る。ラーキンがこの詩においてメタファを全く使っていないとは思えない。むしろ言葉そのものやその内在するイメージなどからメタファととれる個所が少なからず存在し、そういったメタファにより詩の内容に別の意味が生じてくる、すなわち詩の解釈の多様性が生じることこそラーキンの詩の大きな特徴であると思われる。例えば、この詩と同詩集に収められ、同様にメタファを使っていないとされている「午後」(‘Afternoons’) という詩では、時の移ろいという主題の中で児童公園のブランコと砂場が時計の振子と砂時計のメタファであるし、タイトルそのものの午後という時間帯は結婚、人生、国家や社会、究極的には階級制度という英国の一伝統といったいくつもの事項が、各々ピークを過ぎて下降へと向かい始めているといった内容をも暗示させているとも解釈できる²。

故にこの詩を運命論、宿命論の詩と一般的に解釈する一方で、別の解釈も可能となってくるのではないかと憶測できる。そのためには、詩中の言葉のもつ直接的、間接的両

方のイメージの広がりを手がかりに考察していかなければならない。そこでまず目につくのが、投げられた“core”である。最終行のりんごとの関係から考えれば、これをりんごの芯とする一般的解釈は不動のように感じられる。しかし、幸いなことに、この“core”には直接的にりんごを暗示させる形容が施されていない。“core”の第一義が果物の芯であるので、ほとんどの読者が後のりんごと絡めてりんごの芯ととる。これが普通であり、当然のことであろう。

しかし、あくまでもイメージとしての話だが、この詩をざっと一読した直後に筆者のイメージした光景は、ダーツの失敗であった。その際、“core”はダーツの矢の中心をなす硬い鋼鉄製の針芯とイメージした。的が何かに狙いを定めて“core”を投げて自分の運を試すという動作、“core”の有する硬いイメージ、さらには横滑り(Skidding)する様子から(りんごの芯はどちらかというところごとと転がるイメージが浮かぶ)ある程度の重さと何より細長さ、表面のなめらかさが必要ではないかと考え、そう思いついた次第である。生憎どの辞書に当たってもダーツの針芯としての意味を“core”は有してはいないが、ダーツの矢の商品名に“Core”, “Core Brass”があることを発見し(S-Darts, web page), そのわずかな可能性を見出すことができた。これは先の引用における極端な換喩表現としてイメージした結果であるが、むしろこの場合は提喩(synecdoche)的と言ったほうがいいかもしれない。いずれにしても広い意味でのメタファに属するわけではある。

このようなメタファとしてのラーキンの詩語の多重性については、先の「午後」の例とともに、少し極端な例も挙げておく必要があるだろう。前詩集『騙され方の少ない者』(The Less Deceived, 1955) 所収の「草地にて」(‘At Grass’)における第3連を提示したい。

Silks at the start : against the sky
Numbers and parasols : outside,
Squadrons of empty cars, and heat,
And littered grass : then the long cry
Hanging unhushed till it subside
To stop-press columns on the street.
(Larkin, ‘At Grass’ 3rd stanza)

スタート地点に並んだ騎手服。青空に浮かぶゼッケン番号とパラソル。場外では、隊なす駐車車両、熱気、ごみだらけの芝生。それから大歓声が収まることなく続き、収まる頃には街頭販売の夕刊割り込み記事が出る。

これは、現役を引退した老競走馬を眺め、その15年前の現役時代を回想している場面であるが、櫻井氏の著書に以下のような記述があり、上記以外の内容も含めて少し長く引用する。

八〇年になって、昔は昔でも、帝国主義を懐かしん

でいる部分があるといわれるようになった（ブレイク・モリスン）。競馬場の外で車が並んでいる様子は、「兵隊」が群がっているようだと言っている。駐車場に照りつける陽光は暑く、あたりにごみが散らばっているところは、戦場を思わせるではないかとモリスンはいう。「無名の」（筆者註：“anonymous”，1. 6）、「年鑑に入った」（同：“Almanacked”，1. 24）、「思い出」（同：“memories”，1. 19）といったことは、兵隊の戦死などに関係があるはずだともいう。（略）ポウリンは、作品の中の老馬を、憎むべき大英帝国を支えて退役した老将軍だと見る。また馬（将軍）を迎えた馬丁（将軍に仕える兵士）（筆者註：“groom”，1. 29）と少年（少年兵）（同：“groom’s boy”，同行）がやってくるころには、憎むべき階級制度があらわれていると見る。（櫻井 97-8）

特にモリスンの解釈に関しては、詩中の言葉を metonymy, synecdoche として解釈した結果であろう。これがメタファであっても構わないとも思うのだが、要はこれらの解釈もイメージが先行した結果であると考えられる。

故に、このような先行研究を鑑みれば、やはり極端な解釈ではあることは否めないけれども、それが許されるのなら、ダーツの失敗から自分の不運や敗北を感じとった詩人が、それを運命論や宿命論へと発展させるといった先の一般的解釈と共通する流れになることが確認できる。ただ、その際りんごとの関係をどのように処理するかという問題が残るが、りんごはダーツの矢を投げる際の標的だったか、あるいはダーツに成功したら食べようと思っていた褒美だったと考えればそれほど違和感もなくなる。失敗したが故にりんごは食べられることもなく、傷つくこともなかったわけであるし、不運や敗北に満たされた詩人は、もう一度投げしてみようなどとは考えることもなく、手は穏やかに下げられたままなのである。故に詩人とりんごは各々敗者と勝者と区分されるが、一般的解釈と同様に詩人がりんごを食べてしまえばりんごそのものも敗者となり、この世に勝者などいないのだという既述したラーキン独特の運命感として結実することが可能となる。

さらにイメージを先行させて考えることが許されるのなら、“core”をダーツの矢に似た、先の尖った物で、中心に芯を持つものとして鉛筆やペンとすることはできないだろうか。無論鉛筆の芯は“lead”であるし、ペンに芯があるのかとの疑問もある。しかし鉛筆の構造上“core”と呼び得るものが鉛芯であるとのイメージはダーツの針芯よりは比較的容易であるし、ペンもインクカートリッジが鉛筆の芯に相応し得るであろう。さらに、そのペンなり鉛筆なりをゴミ箱としてのバスケットに投げるという動作から、文筆活動を故意に中止していることになる。これは詩人が己の詩作の行き詰まりにより、癡癡的にペンや鉛筆を投げている姿としてイメージすることができる。そのペンがゴミ箱には入らず床を滑りゆく。詩人として詩が書けないのは詩人として成功する運が遠ざかってしまうことであり、当然詩が書けなくなるのは詩人としての敗北に他ならない

し、ゴミ箱に入らなかったことがさらに自分の不運や敗北を増大させ、駄目押しを与えていることにもなる。

この詩を書いた頃のラーキンは短い詩ばかり書いていた。先に引用した箇所をもう一度、もう少し長めに示したい。

Larkin had called 1959 his ‘busiest’ year; 1960 was busier still. He kept up a steady flow of short lyrics — in January an aphoristic paean to selfishness (it’s ‘like listening to good jazz/With drinks for further orders and huge fire’); in February an equally concise and more resonant *memento mori* ‘As Bad as a Mile’, and in August finished ‘Talking in Bed’ and wrote ‘Take One Home for the Kiddies’ and ‘A Study of Reading Habits’. (MOTION 299)

ラーキンは1959年を「最も忙しい」年と呼んでいたが、1960年も相変わらず忙しかった。彼は確実に短詩を書き続けた—1月、利己（それは「酒をおかわりを求めてどんどん飲み、大きな暖炉の前で/よいジャズを聴くような」もの）に対する格言的な賛歌（筆者註：「本には暇がない」‘None of the Books Have Time’のこと）を書き、2月、同じく簡潔であるがより朗々たる死の表象、「かなり悪い事態」を書き、そして8月には「ベッドでの語らい」が完成し、「子供へ一つ持ってお帰り」と「読書習慣の一研究」を書いた。

彼は精力的に詩を書いていたように思われるが、逆を言えば短い詩しか書けなかったのではないか。確かにラーキンの詩は全年代を通じて短いものが多く、その中でも優れた詩は沢山存在している。故に長い詩がラーキンにとってのよい詩とは限らないが、長い詩を書くことに限界を感じていたのではないか。多忙による短詩の乱立は書けないことをカムフラージュするためではなかったのか。

ここで具体的にラーキンの多忙さを記しておく必要があるだろう。ハル大学図書館司書であったラーキンは、図書館の改築のため精力的に陣頭指揮に立っていた。図書館の第一期拡張工事は1959年に終了、膨大な数の本の移動が続き、翌60年にはエリザベス女王臨席による開館式典が執り行われ、その後も第二期拡張工事への計画に忙しかった（1970年完成）。またプライベートでは、恋人のモニカ・ジョーンズ (Monica Jones) の両親が1959年10月(母)、12月(父)に相次いで亡くなり、憔悴したモニカへの気遣いや、それに伴うモニカのラーキンへの依存が大きくなっていった³。そのような公私に渡る多忙さは精神の疲れを導く。その多忙さ、精神的な疲労のなか詩を書くことは詩作への意欲を一時的にせよ弱めていたのではないか。

しかし、そのような状況下であっても、ペンを持たねばならない手は、下げられてはいるものの冷静なのである。それは掌の中にあるりんごに起因している。りんごは豊穡の象徴であり（ド・フリース 22）、そのりんごは掌にしっかりと握られているのである。直接りんごを狙ったのであ

れば、ペンをその象徴に投げ、癡癡的に詩作そのものを否定しようとしたとも考えられるが、象徴は失われずに済んだ。ゴミ箱めがけて投げたペンや鉛筆がゴミ箱に入らなかった、すなわち詩作との完全な決別は、それこそ運命的に回避されたのである。一般的解釈の流れを踏まえると、ペンや鉛筆の放棄の失敗の究極的な原因とは詩作豊穡の象徴であるりんごそのものではないか。言わばこの場面は、一般的なこの詩の解釈とは逆になり、自分に運がなかったからこそ詩人に勝者の可能性が残る結果となった。逆を言えば詩人にはまだ十分に運が残っているのである。その結果として、ペンを投げた右腕が穏やかになっているのではないだろうか。故に、この詩は詩作の壁にぶつかってはいるが、まだ創作意欲そのものの可能性は残っているといった詩人の自分への慰め、叱咤激励を表出している詩とも考えたい。

III. 男性として恋人との関係を吐露した詩

さらに、この詩のメタファやイメージを最大限に生かして拡大解釈してみたい。その際必要となるのは、ある語句の内在するスラングとしての意味や音の類似性といったものである。これら一種の語呂合わせ、言葉遊びはラーキンの詩に関して珍しいことではなく、むしろかなり多くの詩の中で似たような現象がその詩において重要な働きをしているのが見受けられる。たとえば、同詩集内の「ブリーニー氏」(‘Mr Bleaney’)の“Bleaney”は“bleak”(寂しい)、“lean”(痩せている)、“mean”(けち、劣っている)と共鳴するとの指摘があり(櫻井115)、ブリーニー氏の内面のイメージを暗示させている。また同詩集のタイトルがエムである「降臨節の婚礼」では、新婚旅行へとロンドンに向かうカップルたちが列車内で過ごす50分という時間を新婦が帽子をかぶりなおして「死にそうだったわ」(‘I nearly died’)と言う時間に過ぎないと述べているが、これは結婚式、披露宴を滞りなく済ませた後の疲れた新婦の発言とともに、来るべき初夜での情事(詩中では「宗教的受難」“religious wounding”, 1.55)を終えた新婦がはだけた服を整える際に発する言葉ともとれ、そもそも50分という時間そのものが初夜での情事に要する時間とも考えられる⁴。さらに、やはり同詩集内の「ベッドでの語り」(‘Talking in Bed’)では、その2行目の“Lying”が倦怠期を迎えている恋人たちがベッドで横になっているという意味に、冷めた二人が会話、行動において嘘をついているという意味を重ねている。

一方、スラングに関しては、やはり同詩集内の「太陽いっぱいプレスタティン」(‘Sunny Prestatyn’)において、ウェールズの名も知れぬ夏のリゾート地“Prestatyn”が、“press tim”, “press on tim”等と類似した音を有し、“tim”とは男性器のスラング“timothy”の略語と判断し、そのリゾート地の宣伝ポスターのコピー、“Come to Sunny Prestatyn”は男性器を握りしめることによって“Come”しなさいとポスターの中の水着でポーズをとる娘が、あたかも売春婦のようにポスターを見つめる男性に対して挑発的に訴えているとも読める。また同詩のポスターの構図を

描写した箇所、

Behind her, a hunk of coast, a
Hotel with palms
Seemed to expand from her thighs and
Spread breast-lifting arms.

(Larkin, ‘Sunny Prestatyn’ ll. 5-8)

彼女の背後には、ちょっとした海岸、一つの
ホテル 椰子の木を湛え
それらが彼女の両腿から生え広がり
胸を吊り上げる両腕を押し広げている様に見えた。

で、“hunk”を「魅力的な男性」の意のスラング、“palms”を語呂あわせで「手」とし、特定の場所に限局する言及を排除すると“Behind her, a hunk …/palms/expand from her thighs and/Spread breast-lifting arms.”と性的な要素がより明らかになり(CLARK 121-2)、加えて引用した最初の行の不定冠詞“a”がその行為に伴う吐息や詩人の感嘆を表す“ah”とも響いてくる⁵。このようにラーキンは言葉遊びや語呂合わせ、スラングとして内在する言葉の意味を巧みに操り、一般読者には気づかれないように自分の嗜好であるポルノやセックスといったものを表現する傾向が殊に強いのである。

故に、この傾向に即して考えれば、ラーキンにある程度知っている読者は“core”から“hard core”というポルノを表すスラングをイメージすることができるだろう。そして、この“hard core”というスラングは「勃起したペニスの描写に関連があって『硬い芯』と表現したと考える者もいるらしい」(スラング辞典231)。一方、この詩で“core”を形容する“shied”は「しり込みした」とも解釈できる。“shy”には後ずさりするや引き下がるといった意味もあり、そう考えれば萎縮した男根ということになる。言わば“shied core”は“hard core”を逆の意味としてもじった表現と考えられる。その萎縮した男根がぶつかるバスケットとは女性器のスラングでもある(スピアーズ30)。そして横滑りする床とは女性器の周辺を連想させ、“floor”を“flower”のもじりだとすれば、それはやはり女性器のスラングである(スピアーズ183)。すなわち弛緩した男根が女性器周辺で折れ曲がり性交へと至らぬ場面が連想される。そんな状況は男性に運のなさや敗北感を如実に感じさせる。その敗北感が上ってくる腕もまた男根のスラングである(スピアーズ16)。持ち上がらない手とは腕との縁語として考えればやはり男根の先端を表し、そんな男根は当然穏やかな状態にある。手の中のリんごはウェールズの詩人で若い頃のラーキンがよく読んでいたディラン・トマス(Dylan THOMAS, 1914-55)的に考えると性器としてのイヴの果実であるかもしれないが(ド・フリース23)、ここでは相手女性の乳房か、しかしそれもかじられることはなく、つまりそれより先には性交の場面は進まないのである。

この詩の解釈における性交の相手の女性が誰なのかは興

味を抱かせるが、「個人的な事情というものは、ラーキンの作品にはずっとついてまわり、自分の詩をそのようにするというのがラーキンの信条でもあった」（櫻井 46）という意見を踏まえれば、これに関しては二人考えられる。一人は当然恋人のモニカであり、もう一人はハル大学図書館でラーキンの部下として働いていたミーヴ・ブレンナン（Meave BRENNAN）である。ただ、伝記的に考えれば相手はこの二人のうちのいずれかと解釈して問題はないであろうが、性交が中断、不能となる原因は各々によって異なってくると考えなければならない。

まず相手がモニカだとすれば、この性交の中断の原因はミーヴの存在ということになる。この時期はラーキンがミーヴとの親交が深まりつつあった時期に当たるので、ミーヴのことが脳裏を過ぎるとさすがのラーキンも躊躇したのかもしれない。また既述したようにラーキン自身が自分を頼りにしすぎる（と彼が感じていただけかもしれない）モニカに対して嫌気が差していたとも考えられ、既述した「ベッドでの語り」での偽りを重ねた上での性交がさらに悪化した状態とも考えられる。

一方、相手をミーヴとした場合、この時期に彼女との性交が果たしてあったのか否か定かではないが（おそらく1962年以降か）、そこに至る段階での未遂なら十分考えられる。ロマンティストで敬虔なるカトリック信者であったミーヴとの性交へと至る道のりは、ラーキンにとって気苦労と勇気のいることであつたらう。ましてや二人が初めて結ばれつつある場面であればなおさらである。スラングでは、既述した“floor”からもじった“flower”には処女膜という意味さえもある（スピアーズ 183）。当時ミーヴは30歳で、ある男性との婚約が解消されて間もなかったそうであるが（MOTION 298）、それでも未婚、非常に熱心で敬虔なカトリック信者であったことを踏まえれば、彼女が性交に関して未経験かそれに近い状態であった可能性は高い。性交への喜び以上に不安や緊張、恐れといったものをミーヴのみならずラーキン自身も感じていたことだろう。結局性交は中断してしまうのであるが、そこには不運や敗北以上にホッとした感覚があるのではないか。それが“calm”という言葉に凝縮されているのではないだろうか。この詩の脚韻は第一連が“core”, “floor”, “more”, 第2連が“arm”, “calm”, “palm”でそれぞれ“oh”, “ah”というラーキンの感嘆の響きに聞こえる。第1連は嘆きからくるため息のような印象を与えるが、第2連はそれに加えて“calm”に凝縮されている安堵感が重なっていると感じられてならない。

そして、この二人の女性との性交の中断に関して重要な意味を持つのがりんごの存在である。一般的解釈に即して、性交中断の究極の原因がりんごの存在そのものにあるというのであれば、相手がどちらであれ、ミーヴに対する想いがりんごということになる。モーシオンは『ラーキン伝』の中で、ミーヴがラーキンに、若い頃の自身が強く影響を受けたアイルランドのノーベル賞詩人イェイツ（W.B. YEATS, 1865-1939）の永遠の恋人であったモード・ゴン（Maud GONNE）を連想させたと言っており、それは見

た目が似ているからではなく、ミーヴがラーキンの最もロマンティックな感情を喚起させたからだと説明している（MOTION 298）。そういったミーヴへの想いが強くなっているが故にモニカを抱くのも躊躇し、ミーヴを大切に扱おうとする。また先に述べたように、りんごを女性の肉体の象徴としての乳房ととらえれば、一般的解釈で発展させた、りんごを食べなければ失敗することがなかった故にもうりんごは食べないという決意にもつながる。この場合、ミーヴが相手なら、大切に思うが故にもう二度と彼女の乳房をかじるようなことはしないととれるし、今後モニカの乳房をかじらないととれる。モニカが相手の場合、ミーヴへの想い（というよりもこの場合ミーヴとの性交願望）が強くなったので今後モニカの乳房をかじらないととれる。

しかし、相手がどちらであれ、一般的解釈で示したとおり、そこに女がいるから抱いたのだという考え方もできる。「太陽いっぱいプレスタテン」でポスターの娘を想像で犯し、女性の社会進出を毛嫌いする姿を表出している詩人であるから⁵、サディスト的な詩人の性癖も含めて、女性との関係、しかも性交においては自身の優位性に重きを置くのも当然であつたらう。実際、ラーキンはミーヴについてさえ、彼女の腕と脚の毛深さにとっても興奮したとモーシオンに語っている（MOTION 298）、女性を自分の性欲を満たすためのある意味道具として扱っていた可能性が高い。そこに山があるから登るではないが、抱ける女性が手の届く範囲（掌の中のりんご）にいるから、その気はなかったが（という言い訳的な名目で）抱いたのだということにも女性蔑視的なラーキンの性癖が見え隠れしている。しかも、自分が性交不能に陥った事実を棚に上げ、その事実が自分にとってショックであったか否かは別として、その原因を抱いた女性の存在そのもの、その女性の肉体の象徴で愛撫する際まずは触れるであろう乳房のせいにしてるのであれば、これほど自己中心的で女性蔑視に満ちた考え方はないだろう。

以上、この詩の解釈に関して想定できる三つの読み方を提示してきたが、詩が読み手によっていかに解釈が変わるかを実証的に論考したつもりである。既述したように、ラーキンが自分の詩を「好きなようにとっていただいて構わない」と言った以上、その解釈は我々読者に委ねられてしまっている。

しかし、ラーキンのこの発言はカムフラージュ的な弁解が込められているのも事実である。彼の詩は表面的には一般的なこと、目に見えるものを描写している傾向が強いが、その裏には必ずと言っていいほど詩人の個人的な見解が隠れている。この詩の場合も、ありふれた失敗から運命論へと膨らませる一般的な解釈の奥に、詩人としての心境や自分の恋人達との性交の場面を隠蔽していることになる。

ラーキンは世間体や人の目を気にする、非常に素直ではない詩人であり、自身の真意を詩の奥底へと隠蔽してしまう傾向にあるが故に、こういった多様な解釈の広がり可

能となる。その可能となる多様な解釈のどれが最もふさわしいかは、やはり読み手に委ねられてしまうわけではあるが、この詩に関しては、既述してきた読み方が進むに連れ、詩人の真意に近づいているのではないかと考えられる。

この詩のタイトル ‘As Bad As a Mile’ は、“A miss is as good as a mile.”（失敗、ミスなどをしたことには変わりない）という諺から転用したものであると考えられるが、この諺は相手のミスが自分にとって「都合がよい」という意味である（『口語英語大辞典』404）。よってこの場合はその逆であるから自分の失敗が自分にとって「都合が悪い」となる。故に、タイトルから表面上はありふれた失敗を “as bad as a mile” と落胆している詩人の姿を思い浮かべることが一般的ではあるが、詩作への可能性がまだあること、ミーヴの存在が大きくなりモニカと性交できなかったこと、さらには大切に想っているミーヴを汚すような事態にならずに済んだことは詩人にとって “as good as a mile”（この場合、自分のミスが自分にとって都合がよいと考えなければならない）なのである。むしろ “as bad as a mile”（この場合も相手のミスが自分にとって都合が悪いとなる）なのは、それほどまでにミーヴに想いを寄せ、ミーヴのことで頭がいっぱいのラーキンに、そうとも知らず体を許し、結局は途中で放棄されてしまったモニカなのではないだろうか。

註

¹ ちなみにスウェイト (THWAITE, Anthony) 編のラーキンの『全詩集』(Collected Poems, 1990) を調べると、最も短い詩は ‘When the Russian Tanks Roll Westward’ で2行、次いで ‘In Times When Nothing Stood’ が3行、続いて ‘Administration’, ‘By Day’, ‘A Lifted Study-Storehouse’, ‘This Is the First Thing’ が4行で並び、次に ‘As Bad As a Mile’ と ‘Down’ が6行で続く。

² 詳細は筆者拙論「フィリップ・ラーキン『午後』を読む」(『白山英米文学』28号, 49-68, 東洋大学英米文学科, 2003年) を参照

されたい。

³ これら伝記的な内容は、モーション (MOTION, Andrew) 著の伝記に拠る (Philip Larkin : A Writer's Life, 295-307)。

⁴ 詳細は筆者拙論「フィリップ・ラーキン『降臨節の婚礼』を読む」(『白山英米文学』27号, 21-24, 東洋大学英米文学科, 2002年) を参照されたい。

⁵ 詳細は筆者拙論「フィリップ・ラーキン ‘Sunny Prestatyn’ を読む」(『異文化の諸相』27号, 151-61, 日本英語文化学会, 2006年) を参照されたい。

⁶ 上記筆者拙論「フィリップ・ラーキン ‘Sunny Prestatyn’ を読む」を参照されたい。

引証資料

CLARK, Steve. “Get Out As Early As You Can”: Larkin's Sexual Politics'. REAGAN 94-134.

KUBY, Lolette. *An Common Poet for the Common Man : A Study of Philip Larkin's Poetry*. Paris : Mouton, 1974.

LARKIN, Philip. ‘As Bad As a Mile’. THWAITE 125.

LARKIN, Philip. ‘At Grass’. THWAITE 29.

LARKIN, Philip. ‘Sunny Prestatyn’. THWAITE 149.

LODGE, David. ‘Philip Larkin : The Metonymic Muse’. SALWAK 118-128.

MOTION, Andrew. *Philip Larkin : A Writer's Life*. London : Faber & Faber, 1994.

S-Darts (Online Darts Shop). <http://www.s-darts.com/shop/unicorn_2008.html>

REAGAN, Stephen, ed. *Philip Larkin*. London : Macmillan, 1997.

SALWAK, Dale, ed. *Philip Larkin : The Man and His Work*. Iowa City : University of Iowa Press, 1989.

THWAITE, Anthony, ed. *Philip Larkin : Collected Poems*. London : Faber & Faber, 1990.

朝日出版社編『口語英語大事典』東京：朝日出版社, 1994.

櫻井正一郎『イギリスに捧げた歌—フィリップ・ラーキンを読む』京都：臨川書店, 1990.

リチャード・A・スピアーズ著 山田政美訳編『英語スラング辞典』東京：研究社, 1989.

アト・ド・フリース著 山下圭一郎他訳『イメージ・シンボル事典』東京：大修館書店, 1984.

Three Readings of Philip Larkin's 'As Bad As a Mile' : Possible Interpretations of a Poem

By

Toshiharu KIMIJIMA*

(Received February 22, 2008/Accepted June 6, 2008)

Summary : This paper presents three readings of Philip Larkin's 'As Bad As a Mile', and explores the possibility of interpretation of this poem. In general, this poem shows Larkin's fatalism through a common situation : a man experiences his poor luck or defeat through a common trying of his luck. However, this poem can also be interpreted as follows : the poet suffers from writers' block and loses his temper, but rediscovers creativity and finds encouragement. Furthermore, interpreted in metaphorical and symbolical ways, this poem can be regarded to contain many sexual meanings and to describe scenes of sexual intercourse between the poet and his two lovers. Although it is difficult for the readers to decide which is the best reading of the three, it seems that the last metaphoric and symbolic one is closer to the poet's intention.

Key words : Philip Larkin, 'As Bad As a Mile', *The Whitsun Weddings*, English Literature, Modern Poetry

* Fundamental Arts and Sciences (English), Faculty of Bioindustry, Tokyo University of Agriculture